

Q-5 探究的な授業は時間がかかりすぎるから、国分寺高校には合わないのでは？

探究的な授業については、次のような声を耳にすることもあります。

「まずは基本的な知識・技能を身につけてからではないか？」

「探究的な活動は時間がかかりすぎるから国分寺のカリキュラムに組み込めないのではないか？」

ここでは、こうした疑問について少し整理してみたいと思います。

① 「基礎・基本」と「探究」はセットで考える

「探究」は応用・発展的な内容ではなく、基礎・基本を深く理解するための“プロセス”です。「なぜそうなるのか」、「どの条件が重要なのか」、「他の考え方はあるのか」といった問いを通じた試行錯誤こそが、知識を表面的な暗記に留めず、生きた学力（≡初見の問題でも対応できる力）として定着させます。

② 「小さな探究活動」＝「学びのアクション」から始める

探究的な学びというと、長時間のプロジェクトや研究活動を思い浮かべる先生もいらっしゃるかもしれませんが、もちろん、理数探究や総合的な探究の時間ではそのような活動が行われます。しかし、授業の中での探究的な学びは、必ずしも大きな活動である必要はありません。たとえば、“異なる資料を並べて検討する”，“プレゼンテーションで考えを伝える”，“異なる視点に関連付ける”といった活動も、探究的な学びの一つです。こうした活動は、BS版 No.3 で紹介した「学びのアクション」にもつながるものです。

③ 「全時間探究的」でなくてもよい

すべての授業を探究的にする必要はありません。講義や小テストを実施することも当然あります。ただし、これらは知識の整理や探究の補完として位置づけられることが大切で、あくまで授業内の思考の柱は「探究」になります。毎時間ではなく、単元の中で「ここぞという場面」に思考の場をつくることが、探究的な学びの実現につながります。

探究的な学びは、特別な授業ではなく、日々の授業の中で思考の場面をつくることから始まります。

探究×ICT 『Padlet』—「②比べて考える」「⑩図や表で示す」「⑫関係を整理する」等の学びのアクション実現へ

■ Padlet の特徴

- ・情報の「一覧性」：全員の意見がリアルタイムで一つの壁に並ぶ（付箋のイメージ）ので、クラス全体の傾向が一目でわかります。
- ・マルチメディア：写真、音声、手書き図、動画もペタペタ貼れる。まさに「デジタルな模造紙」です。
- ・ボードのPDF化：画像やPDFに落とし込むことも可能です。

■ 活用場面

授業中の意見共有や、導入・まとめの場面で活用できます。また、オンライン授業でも活躍します。

■ 発問例 「どの考えが一番納得できる？」「考え方をグルーピングしてみよう」

💡 「まず全員の考えを並べる」だけで、授業に比較と対話が生まれ、探究的になっていきます。

